

まちのにぎわい拠点となる桑名駅ビル・駅広場の再生計画

建築計画研究室 谷森 歩果
(令和5年2月8日提出)

1. 研究の背景と目的

2020年8月末に東海旅客鉄道・近畿鉄道・養老鉄道が乗り入れ、徒歩圏に三岐鉄道北勢線が接続している桑名駅に、橋上駅舎と自由通路が完成した。踏切へ迂回せずとも駅の東と西を往来できるようになり、今まで共同利用だったJRと近鉄の改札口が別々に設置され、利便性が高まった。しかし、旧桑名駅ビル（桑栄メイト）は空き店舗の増加や施設の老朽化などが問題で、閉店したまま残存している。また、駅広場のタクシー乗り場が改善されておらず、歩道橋も使用できない状態で撤去されていない。そこで、駅ビル・駅広場の再生により、桑名市の中心拠点をつくることで市街地の活性化を図る。敷地の機能として、桑名市の立地適正化計画を調査し、桑名駅周辺地区の課題を整理し、課題解決を踏まえて計画を行う。



図1 桑名駅地図

2. 桑名駅ビル・駅広場の現状の課題と整備方針

(1) 桑名駅周辺地区の課題の整理

桑名駅周辺地区の課題は主に4つ挙げられる。一つ目は、商業機能、子育て支援機能、生活利便機能を備えた中心拠点誘導施設を整備する必要がある。二つ目は、桑名駅周辺への都市機能の集積により、にぎわいと活力ある中心拠点を形成するため、民間主導による開発を誘導する必要がある。三つ目は、駅前広場の機能配置を検討する必要があるため、公共交通の考え方や一般車利用状況の整理が必要である。最後に、駅舎・駅前広場は、全体的に統一されたデザインにする必要がある。駅前の建物を考える際、駅舎及び自由通路と統一されたデザインコードを用い、桑名市のブランドイメージに即した景観形成を行う。

(2) 桑名駅周辺の整備方針

駅前には、桑名市の顔となるシンボル空間として、市民が憩い、集い、交流ができる空間や、イベントスペース、観光交流拠点となる機能、商業機能や子育て支援機能などの核となる都市機能を集積させることにより、利便性・快適性を高める。また、交通広場機能を高めるとともに、自動車の交通流の整理などの公共広場の再編、観光バスや送迎車の乗降スペースなどの交通結節機能の強化をすることで、駅利用者の利便性・安全性の向上を図る。桑名ブランドの推進として、日本で唯一の4社の鉄道と3種類のゲージが見られること、ブランドマークの浸透などに焦点を当て、桑名の“本物”を見せる仕掛けづくりや情報発信を行う。

3. 桑名駅ビル・駅広場の計画および設計方針

桑名駅ビルと駅広場の計画にあたり、桑名駅ビルを中心とした、利用者が使いやすい空間づくりを意識する。駅広場やターミナルも使いやすく、交通機関の乗り換えがスムーズとなるように計画する。そして、地域市民が必要とされる中心拠点となり、居場所と感じられる空間を計画する。そのために、商業施設を始めとして、子育て支援施設などの生活利便機能を駅ビルに集積させ、市民の日常生活をより快適なものとする。また、桑名駅の来訪者も引き付ける、町のシンボルとなるように計画する。新駅舎や周辺の施設、観光施設、自然を活かして周辺との繋がりと調和も考慮する。新駅舎と駅ビルの外観を統一するために、桑名駅のデザインコードとされているカラーや木材、石材を外観に用いる。地域に開かれたエリアとすることで、人々が利用する頻度を高め、さらには中心市街地活性化に繋がると考える。また、デンマークの建築家 Sim=David が提唱する「Soft City」の理念を取り入れて、公共空間である歩道やロータリーの計画も行う。

4. 桑名駅ビルの計画・設計

都市機能誘導区域は、桑名駅を含み、現況のサービス施設の立地状況を考慮した徒歩圏（半径 1km 圏域）を設定し、桑名駅周辺地区の誘導施設は、商業施設、保育所等であることが明らかになった。

主な機能として、商業機能、子育て支援機能、観光機能、生活利便機能の 4 つを挙げる。建物は地下 1 階がある 4 階建てである。初めに、市民活動を便利にするサービス機能の商業施設として、1 階にカフェテリア、地下 1 階にスーパーマーケットを設けた。また、1 階にギャラリー、観光ステーション、イベントスペースを設け、観光交流拠点となる機能を持つ。桑名駅周辺における地域の価値やブランドを維持・向上させることが重視し、桑名市のブランドロゴマークを平面図に投影した。次に、次代を担う子どもの子育て支援機能としてサービス特化の私立保育園を 3 階に設けた。働く人のための保育園として、延長保育、夜間保育、学童保育を主に考えた。次に、市民が憩い、集い、交流ができ、居場所と感じられるような公共空間を 2 階のフリースペースに設けた。このフリースペースでは、家のリビングのようにつつろぐことが可能である。老若男女だれもが憩い、集い、世代が混ざり、交流ができる場となる。また、2 階に study studio を設けた。study studio は、高校生が主に利用する。無償の自習スペースと有償のオンライン指導スペースの 2 つの空間を考えた。最後に、最上階に備蓄倉庫を設け、建物が一時避難所の役割も果たす。

5. 駅広場の計画・設計

計画を行うにあたって、タクシー乗り場を整備する必要があると考えた。タクシー乗り場については、「Soft City」の考え方で計画する。「Soft City」では、歩道をプラットフォームにする際の利点が書かれている。本計画では、歩道がタクシー乗り場（プラットフォーム）になり、駅舎と駅ビルとの連絡通路の下が乗り場となるように設計した。駅利用者が天候に左右されないタクシー乗り場とした。また、タクシーの前後に間隔をあけることで、荷物の積み下ろしを容易にした。また、デザインコードの和の要素として、連絡通路の梁に県産木材である尾張ヒノキを使用する。木材は、構造機能だけでなく、影の落ち方で街路に彩りを与える役割を果たす。環境負荷の少ない建材と地域の森林で育った木材を利用することで、間伐等の推進にもつながり、地域の森林を健全に保つことにも繋がると考えられる。

6. まとめ

本計画は旧駅ビルの建替えを行うことで、駅利用者の利便性・安全性・快適性を高める都市形成を行った。まちの魅力を高める都市機能を集積させ、駅利用者のための施設だけでなく、日常的に利用する市民も自分の居場所と感じられるように計画した。また、桑名駅周辺の課題に対して、駅ビルにさまざまな機能を集積し、課題解決に貢献できるように計画した。桑名の玄関口である駅と駅ビルが活気のあるエリアになることは、地域全体に活気をもたらすし、さらには中心市街地の活性化にも繋がると考える。



図 2 桑名駅ビル再生計画

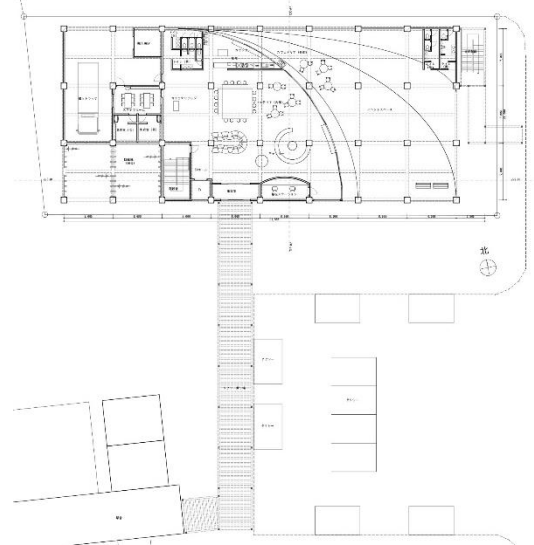


図 3 1階平面図



図 4 タクシー乗り場